

吉岡まさみは Gallery58 においては写真とテープを用いたインスタレーションを1点、steps gallery においては小品を7点、展示した。いずれを見ても吉岡の作品の特徴に平面的/映像的要素は全く無く、テープが積み上がる断層による立体化 = 彫刻的要素よりもむしろ、絶対的な絵画 = インスタレーション的着眼点が強く作用していることを強調しすぎてもその本質から逸れることが決してない。



まずは小品を見ることによって、その絵画性について考察する。吉岡は具体的な形を形成しない。すると、具象を崩壊させて抽象へ向かう傾向も排除される。しかし抽象表現主義、ハード・エッジ、非対象絶対抽象という動向とも無縁である。では、何が描かれているのだろうか。それは視線と手の動きが造型し得ない思考そのものである。思考そのものが描くことが不可能な視線と手の動作と言い換えてもいいかも知れない。吉岡の作品から東洋的な印

象、西洋的な図像を読み解くことは見る者の勝手である。そこよりもむしろ、見る者の在り方、ここに絶対的な絵画的な絵画の存在理由がある。何故なら絵画とは、本質的に見る者に委ねる性質を持たざるを得ないことに直面するからだ。吉岡はここから脱却しようとは一切しない。そのために、絵画の本質を携える運命を背負う。



この運命に、サイトスペシフィックとは異なるインスタレーションの意義が問われる。吉岡の作品に写真が伴われるかどうかなど問題にならない。見る者の視線、否、肢体の角度を僅かに傾ければいい、そこから垣間見る世界観が、僅かでも変革されれば、それは吉岡の作品の本質に直面したことになる。

吉岡には屋内以上の野外の展示にチャレンジして欲しい。そこに現代の意図を見出す機運がある。(写真：谷津栄紀)

